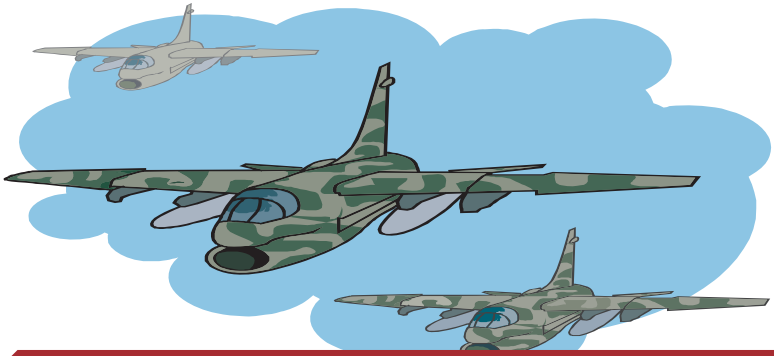

いろはにほへと

戦争シリーズ　②

高 木 徳 一

剣崎鋭介は一段、また一段とゆっくりした足取りで階段を上って行く。

凪の様な平らかな心に、来し方が浮かんできた。

「エイー！」「面！」「胴！」「小手！」

小気味良い掛け声が道場のそこかしこに響き渡る。油蝉の合唱が高窓から雪崩れ込む、一陣の涼風を引き連れて。青年鋭介は面を取り、頭に巻いた豆絞りの手拭いでほとばしる額の汗を拭った。

鋭介の父鉄造は日本橋桶町の『桶町千葉道場』で二代目の千葉重太郎の指導を受け、血の滲む苦労を重ね、免許皆伝を頂いた。初代道場主は北辰一刀流開祖の千葉周作の弟千葉定吉である。その高弟には坂本竜馬がいた。娶ったやえを伴い、故郷の福島県猪苗代村で鉄造も道場を持った。試行錯誤の末に、一撃のもとに敵を倒す自念流を編み出す。

明くる春、猪苗代湖畔の桜が満開の頃、長子鋭介が両親を始め村中の祝福を受けて、この世に生を授かった。『剣崎道場』の門弟達は「若様」と言って、ちやほやする。鉄造も夕餉に向かうと、剣の指導中の面長であの鋭い眼光は何処へやら、にこやかな眼差しを鋭介に投げ掛ける。ニコッと答える跡取り息子。縁側をハイハイして、障子を小さな手で開け、父の書院に入る。

「あら、いけませんよ。お父様は今、御本をお読みになっていらっしゃるのですから」

「良い、良い。そんな事を言っても判る年頃でもあるまい」と鉄造は渋味の声を出し、読み掛けの宮本武蔵が著した『五輪書』を書見台に置いたまま立ち上がり、鋭介を抱き上げた。

柔らかな光が青畳に吸い込まれてゆく。

鋭介が歩き始めると、鉄造は寸足らずの木刀を、裏庭の小さな樫木を倒し、作った。

「ヤア、ヤア、ヤアー」可愛い声が道場の片隅から毎日聞こえる。斬られ役の門弟達も豆剣士には

敵わず、たまに間違えて、「お面！」と一本取ろうものなら木刀を放り出し、父似のやや面長で団栗目に両手を遣り、延々と泣き続ける。

「誰に似て、こんなにも泣き虫なのだ」「私の親戚を見回しても泣き癖の子の噂はありませんから」見詰め合う口元は互いにほころんでいる。次に男の子が生まれ、門弟達も道場の繁栄を確信した。

会津磐梯山に鋭介誕生以来五回目の冬将軍がやってきて、湖面は厚い氷で閉ざされ、魚達も息を潜めて暮らしている或る晩、吹雪は一段と激しさを増し、戸に容赦なく体当たりする。外の轟音に負けじと高らかに産声が上がった。

「旦那様！お生まれになりました・・」下働きの加代が書院の縁側に正座し、中に声を掛けた。

「おおー、そうか」「男の子と女の子ですね」

「な、何と・・」戸惑いを見せながら鉄造は隣室に入り、小顔に汗をぎらつかせている妻に労わりの言葉を掛け、目を閉じている我が子らに目を移した。

「貴方、申し訳ございません」「何も謝る事ないわ。男女の双子は前世で心中した同士の生まれ変わりと言われておるが、俗説に過ぎん」と言ってはみたものの、内心忸怩たるものがある。

鉄造は腕組みをした。

沈黙の後、顎鬚を蓄えた口を開いた。

「そうよな、姉の定子が子供を欲しがっていて、次男の勝之を貰いたがっておったわ。三男坊を養子に出してはどうかの？」「ええ、私もその事を考えておりましたの」「そうか、早速定子に話してみるわな」「ご主人の亀太郎さんも優しい方ですし、呉服屋の商売も繁盛なさっておりますで、この子も幸せになりましょう」「そうよな」

二人は苦渋の決断をした。

話はとんとん拍子に運び、生後二ヶ月になった健吾は、駅前で呉服商『旭屋』を営む神保家に養子に入った。

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。